

その8 都立砧(きぬた)公園

農学博士、元東京農業大学
日本ビオトープ協会顧問

立川 周二



都立公園は都内に74カ所あります。砧公園は23区の中で、9番目に大きな公園になり、その面積は39.2haです。位置は武蔵野台地の西方、世田谷区の中央にあたります。1940年代に「砧大緑地」と呼称されて、軍馬の訓練場や防空緑地として利用されました。戦後は、農地やゴルフ場などに転用されましたが、公園としての整備がなされて1957年に開園されました。

私は世田谷区に、約50年間居住しましたので、地元の昆虫には関心がありました。1981年に、区の小学校にお勤めの福田晴男さんが、「世田谷の蝶」と言う単行書を出版されました。ご自身の調査はもとより、チョウが好きな仲間の報告や資料の情報をまとめた内容で、天からの授かりものと喜びました。

私自身がチョウの調査を始めたのは、この出版から30年後の2012年からですから、世田谷の自然は全く変わっていました。砧公園を調査地として、2016年までの5年間に延114回通って、43種のチョウを確認しました。これら種の出現状況をまとめると、いつも普通に見られた種、1度だけ遭遇した種、これまで東京には生息しなかった種、以前は見られたが調査では見られなかった種など、いろいろな事例がありました。ビオトープの生物多様性に取り組むことは、このような基本的な具体例を観察し、考察することも必要であると思いました。



図1. 砧公園案内図(ホームより)、A. B. Cの3区画に分けられます。Aは雑木林、池、谷戸川が流れ、生きものが豊富な環境です。Bは芝生広場とサクラなど花見ができます。Cはグループや家族でスポーツを楽しむ場所です。



図2. Cの区画では家族でスポーツなどが楽しめます。いつも人出の賑やかな場所です。



図3. Aの生きものが豊富な雑木林。樹液に集まる昆虫なども見られます。



図4. Aの公園ボランティアの方々が管理する花壇、チョウが集まります。



図5. ナガサキアゲハ 東京では2000年ごろから見られるようになった、日本最大クラスのチョウです。



図6. ムラサキツバメ 暖地に生息するチョウですが、1990年代より東京でも見られるようになりました。



図7. ツマグロヒョウモンの雌 50年以前には東京には生息していませんでしたが、今では街中でも普通に見られます。



図8. アカボシゴマダラ 1990年代に中国から人為的に持ち込まれて、関東を中心に拡散しました。特定外来種に指定されています。



図9. クロコノマチョウ 暖地性のチョウで、2000年代になって東京から北関東まで生息するようになったとされます。

編集後記

本号の特集「ビオトープの原点を学ぶ Vol.2」では、私たちが日々向き合っているビオトープとは何か、その出発点と意義を、改めて考える機会となりました。

巻頭で鈴木邦雄先生は、「自然の復元・創造」としてのビオトープの歩みをたどり、その活動に参加することによって育まれる「内なる自然」の重要性にも触れ、現代社会が失いつつある心の豊かさを取り戻す場としての可能性を示唆されています。

一方、特別寄稿では平吹喜彦先生が、ビオトープを「人と自然のよりよい関係を育む場」と捉え、景観生態学とESDの視点から、多様な形をもつビオトープをどのように計画し、運営し、地域に根づかせていくかを丁寧に解説してくださいました。技術革新が進む一方で、地域固有の自然条件や文化的知恵を再評価し、住民と協働しながらハード・ソフトの両面を育てていくことの大切さが、あらためて胸に響きます。

ビオトープは、完成して終わりの「作品」ではなく、地域の人々や訪れる人の視点や関わりによって育ち続ける“生きた場”です。本号に寄せられた各地の取り組みや連載記事にも、その確かな実感が込められていました。みなさまの実践が、地域の未来を支え、次世代の学びと気づきを豊かにする力になっていることを強く感じます。

2026年も、協会として、人と自然が共に育つ社会の実現に向け、知恵をもち寄り、つながり合いながら歩を進めていければと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

お忙しい中ご執筆いただいた皆様ありがとうございました。

編集委員：情報委員 若月学・砂押一成、正副会長、総務委員、本部事務局

自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。 会員募集中

- | | |
|-------|--|
| 会員の種類 | ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人 |
| | ・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人 |
| 年会費 | ・法人正会員 100,000円 |
| | ・個人正会員 10,000円 |
| | 10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。 |
| 会員の特典 | ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。 |
| | ・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。 |
| | ・その他、地区活動への参加など。 |

入会手続き、入会申し込み用紙については、WEBページ<https://www.biotope.gr.jp/application/apply/>または下記本部事務局までメールかFAXでお問い合わせ下さい。

日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No.57

2026年(令和7年)1月31日発行

発行所	特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会
発行責任者	久郷 慎治 (日本ビオトープ協会 会長)
編集	協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局
本部事務局	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-6-7-101 TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651 E-Mail honbu@biotope.gr.jp URL https://www.biotope.gr.jp/

会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。



「オニヤンマ」
写真 内海千櫻氏 撮影